



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	何者として, 何を話すか : 対話型ワークショップにおける発話者アイデンティティの取り扱い
Author(s)	工藤, 充; 秋谷, 直矩; 高梨, 克也 他
Citation	科学技術コミュニケーション, 15, 107-122
Issue Date	2014-06
DOI	https://doi.org/10.14943/66444
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56444
Type	departmental bulletin paper
File Information	web_Costep15_107.pdf



何者として、何を話すか

～対話型ワークショップにおける発話者アイデンティティの取り扱い～

As Any Person, What to Speak:
A Way of Handling Speaker's Identity in Workshop

秋谷 直矩¹, 高梨 克也², 水町 衣里¹, 工藤 充¹, 加納 圭^{1,3,4}

AKIYA Naonori¹, TAKANASHI Katsuya², MIZUMACHI Eri¹,
KUDO Mitsuru¹, KANO Kei^{1,3,4}

Abstract

This practice report raises some questions of dialogical workshop design about science and technology policy topics. Focusing participant's talk, we analyze relationship between presenting participant's identity and facilitator's practice of consolidation of opinions. As a result, we find following points. (1) Presenting identity when particular participant express his opinions make/form relationship with other participant's identity. (2) Participant's identity changes at each time, and relies on course of interactional context. These results provide the resource when we rethink relationship between conservation of opinions diversity and methods of gathering various opinions, and design workshop that oriented deliberative communication in public.

Keywords: identity, deliberative communication, diversity, workshop design

1. 本実践報告の位置付けと目的

「科学の公衆理解」から「科学をめぐる様々な物事への市民参加」への科学技術コミュニケーションのコンセプトの広がりには、科学技術コミュニケーションに関連する取り組みへの市民参加の方法・方法論の再考と、それにともなった実践の再構成を伴うものであった(小林 2007)。

なかでも、より民主主義にもとづいた社会的意思決定手法を探る取り組み(船橋・壽福 2013)や、未来志向的な科学技術イノベーション政策の方向性の国民的議論および合意形成といったトピックにおいて、「対話」のあり方が議論されるようになった。それに伴い、様々な実践が実験的になされるようになった。

近年の事例でいえば、たとえば生物多様性をテーマにした世界市民会議(八木 2010)や、環境・エネルギーの選択を対象に実施された討論型世論調査(Fishkin 2009=2011; 曾根他 2013)のような

2014年3月1日受付 2014年4月28日受理

所 属: 1 京都大学物質-細胞統合システム拠点(WPI-iCeMS)

2 京都大学学術情報メディアセンター

3 滋賀大学教育学部

4 独立行政法人科学技術振興機構, RISTEX

連絡先: nakiya@icems.kyoto-u.ac.jp

かなり大規模なものから、各国・各自治体の政策形成過程に合わせて、様々な参加手法で開催される各種市民参加型ワークショップ(若松 2010)などが挙げられよう。

これらの活動においては、(A) 多様な価値観・知識・認識を持った市民の抽出手法と、(B) 実際に討論することによる、主題に対する意見の産出と集約手法、そして、(C) これらを経たうえでの、ある小・中規模の話し合いの場における意見の一致を目指す手法、以上3点の設計と組み合わせ方が、場づくりをする側の課題として検討されてきた。

一方、本報告の著者らの取り組みである、独立行政法人科学技術振興機構(JST)社会技術研究開発センター(RISTEX)「戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発):科学技術イノベーション政策のための科学研究開発プログラム」採択事業である「STI(科学技術イノベーション)に向けた政策プロセスへの関心別関与フレーム設計(通称:PESTI)」(加納 2013)の一部では、必ずしも合意形成を目的としない、上記(A)(B)に特に指向した取り組みが進められてきた。

このプロジェクトの発足期、試験的に、上記(B)に焦点化したワークショップを企画し、多様な市民の多様な意見の抽出を試みた。そこで企画されていたのは、ワークショップでの参加者間対話における様々な属性を持つ市民の多様な意見を抽出することであった。

(A)と(B)が組み合わされた市民参加モデルの設計と提案がプロジェクトの最終的な達成目標だが、プロジェクト発足期においては、まず、(B)を目的としたワークショップの設計の方向性・適切性や、「多様な市民の多様な意見を抽出する」という目的を実践に落とし込んだときの問題点・留意点の洗い出しがプロジェクトの課題として設定された。本報告は、以上のような目的のもとで実践されたワークショップにおいて見出された課題の抽出と整理を実践報告として行うものである。具体的な焦点については、次章で説明する。

2. 本報告の構成

2.1 本報告の焦点

本報告は、筆者らが参加しているRISTEXプロジェクトPESTI内で数回実施されたワークショップの課題抽出と整理を目的とすると先に述べた。ワークショップの目的も上述のとおりである。そのような目的で数回実施されたワークショップに対して、反省点としてまず挙げたのは、「意見の『多様性』を担保する情報の残し方」の難しさである。本報告では、この点について、いくつかの事例を通して具体的に検討を加えていくが、本報告の見通しをよくするために、議論を先取りし、まずは概要をここで述べておく。

本報告で分析対象としたワークショップでは、特定の議題に対して、参加者は、他の参加者との対話を通して自由に自身の意見や疑問点を述べることが求められた。今回試験的に行ったワークショップは、議題や設計はワークショップ毎に少しずつ異なるが、基本的な立て付けは、参加者間で自由に意見を交わし、そこで出てきた意見を網羅的にまとめるという流れである。

一連のワークショップを終えたところで、筆者らは以下のことに気づいた。それは、どのワークショップでも、参加者間の議論過程で出てきた様々な意見を集約する作業があったが、そこで集約された意見は、いずれも意見産出時に、その意見と結び付けられていたアイデンティティが省略されたかたちでまとめられていたということである。例えば、「宇宙産業の発展のために、軍事産業との連携を推し進めるべきだ」という意見があったとして、その意見がいかなるアイデンティティのもとで産出されたかによって、その理解可能性はかなり変わってくる。となれば、その意見が「何者として」産出されたのかは重要な情報なはずだ。しかし、集約という実践を経たとき、今回筆者らが企画し運営したワークショップのいずれにおいても「何者として」はときに省略され、「宇宙産

業の発展のために、軍事産業との連携を推し進めるべきだ」ということのみが残されたのであった。

ワークショップの企画・運営する側は、しばしば特定のアイデンティティと紐付けられたかたちで意見がその都度産出されていたこと、このことにまったく気付いていないわけではなかった。しかし、それをワークショップ内でどのように取り扱うべきか、という点については、殊更トピックに上がるようなことはなかった。つまり、ワークショップの企画時・進行中には、その点にはさほど注意が払われていなかったのである。しかし、ワークショップ後のリフレクション時に、そのワークショップ過程の特徴に気づいたのだった。

この気づきは、一見トリヴィアルなものに見えるかもしれないが、意見表明を喚起し、かつそこで産出された意見の多様性を担保し、集約することを目的とする活動の場合に、事前に検討すべきトピックと思われた。つまり、出された「意見」に対してどのレベルでその「多様性」を担保すべきか、ということである。

これを「綿密に検討し設定」するためには、産出された意見と発話者アイデンティティの結びつきの特徴について、ワークショップの設計者は通曉しているのが望ましい。そこで、本報告は、今後このトピックでの議論を進めるために、筆者らによるリフレクションの結果見出された上述の課題について、ワークショップの記録をさかのぼり分析を加えていくことによって、現時点で見出された課題のピックアップと整理を行う。

こちらでも議論の先取りになるが、上に述べたことと併せて本報告の結論をここで簡単にまとめておく。ワークショップの記録分析によって、ワークショップをより適切に設計するために、今後より詳細に探求すべきいくつかの課題が以下のように導かれた。まず、(1) ワークショップの参加者が意見を産出するとき、そこではしばしば特定のアイデンティティに紐付いているという特徴が観察されたが、意見集約過程においてそれらのアイデンティティはどう扱われていくのか。もうひとつは、(2) 合意形成を目指していないのに、意見集約過程においては、発話者によって発話時に提示されるアイデンティティの多くがピックアップされない一方で、選択的に残されるアイデンティティがあるということが見られたが、多様な意見の抽出という目的設定がワークショップにある場合、こうしたケースはどのような論理と手続きによって組み立てられているのか。以上2点である。(1) についてより細かく言うと、(1-1) 意見内容を成り立たせるためにアイデンティティを表明するやり方、(1-2) 発話の場における参加の仕方を参加者間で非対称的なものとする、特定のアイデンティティのペア、以上の2点が現時点での注目点である。以上の論点については、次節でワークショップの概要を調査の流れを紹介したあとで、事例の分析を通して、それぞれワークショップ設計上の問題と関連させたかたちで提示する。

なお、意見産出時の意見と発話者アイデンティティの結びつきというトピックについては、たとえば、科学コミュニケーションの分野においては、異なる専門知識を持つ者同士の対話における知識と参与アイデンティティの関係を扱ったVeen (2012) らによる会話分析研究といった先行研究がある。科学コミュニケーション以外の関連研究に目を転じれば、たとえば、発話をどのようなものとして理解すべき／しているか、ということについて、その場面の参与者自身の記述による定式化実践があるということは、例えばエスノメソドロジー・会話分析においてその研究の出発点から指摘されてきたことである (Garfinkel and Sacks 1970; Heritage and Watson 1979)。また、アイデンティティの提示やその理解可能性については、同じくエスノメソドロジー・会話分析に基礎を置いた成員カテゴリー化装置の議論や、ゴッフマンの参与役割やフットイングの議論において、様々なシチュエーションを対象に検討されてきた (Goffman 1961=1985; Sacks 1972; Goffman 1981; Hester and Eglin 1996; Antaki and Widdicombe 1998)。これらの議論においては、特定の人称や表現を発話のなかに組み込むことにより、その発話自体をどのように理解すべきか、ということと、場の参

加者間の社会関係が推論可能になるということが示されてきた。また、そのような実践によって割り振られた非対称的な社会関係は、時に、会話における順番取得や発話の長さといった点に影響を与えるということも議論されてきた (Drew and Heritage 1992)。本報告の分析結果は、現象としては、上述の先行研究内で議論されてきたことと重なることが多い。だが、科学コミュニケーションにおける実験的ワークショップを題材にしているという点での対象選択の新規性はある¹⁾。こうした研究が、エスノメソドロジー・会話分析を含む関連研究分野のなかでいかなる価値を有するのかは、本報告を踏まえたより詳細な事例分析の積み重ねが必要だろう。

本報告は、多様な意見の表明促進とその抽出を目的とした対話型ワークショップにおける、意見と発話者アイデンティティの結びつきにかんする留意すべきトピックの列挙を目的としている。本報告のアカデミアにおける貢献をより明確にするためには、そこで見出された個別のトピックを、上述した研究を含む各種先行研究の整理を行ったうえで論じる必要がある。したがって、今回抽出した個々の課題を対象にした議論は今後の課題とする。本報告は検討課題抽出のための「速報」である。

2.2 観察したイベントの概要

表1 本報告で検討するワークショップの概要

	宇宙バブコメワークショップ	夢ビジョンワークショップ
イベント名	Noti's討論会～宇宙基本計画案についてどう思う？～ (通称:宇宙バブコメワークショップ)。2013年2月21日実施	PESTワークショップシリーズ 知ろう・語ろう・届けよう 科学技術イノベーション政策:第2回「語ろう」(通称:夢ビジョンワークショップ)。2013年10月28日実施
題材の概要	内閣府宇宙政策委員会起草の「宇宙基本計画(案)」の内容に関するパブリック・コメント公募が開催されたのにあわせて開催された。参加者で「宇宙基本計画(案)」の内容を確認し、それを踏まえて議論を行い、最終的にそこで出た意見をパブリックコメントとして届けることが目指された	政府の科学技術イノベーション戦略を踏まえ、参加者間で2020年の日本の未来を描くというワークショップ。グループ内では自由に議論してもらい、参加者らによる多様なイメージや思いを集約することが目的とされた。なお、そこで出た意見は、官公庁内のある政策立案グループに対して、主催者によって届けるということがアナウンスされた
参加方法	Web告知による自由応募	Web告知による自由応募
議論を行うグループ人数	18名。参加者全員で議論を行った	25名。それを5,6名毎にランダムにグループ分けした。なお、議論を円滑に行うために、各グループに1名ずつ、主催スタッフによるテーブル・ファシリテーターが置かれた。
専門家人数	3名。内訳は宇宙システム工学、宇宙物理学、科学教育・科学コミュニケーション	政府による科学技術イノベーション政策について概説する専門家1名
進行役人数・内訳	司会1名、書記1名	全体司会1名、テーブル・ファシリテーター5名
議論中に出た意見の記録法	議論中に出た議論を書記がひとつの意見につき一枚の付箋にメモする。	各グループの議論過程で出た意見は、テーブルファシリテーターが付箋にメモする
アウトプットの集約方法	議論で出た意見(書記によって付箋に書かれた記録)を参照しながら、主催者側で出た意見をパブリック・コメント提出のフォーマットに整形。そして、それをパブリック・コメントとして投稿した	テーブルファシリテーターによるメモを見ながら、出た意見をテーブルごとに参加者自身によって集約し、1枚の紙にまとめる。
記録法	ビデオカメラによる議論の場の撮影・オブザーバー参加の秋谷によるフィールド・ノート	オブザーバー参加の秋谷によるフィールド・ノート
調査の観点	・意見産出のプロセス ・意見集約のプロセス	・意見産出のプロセス ・意見集約のプロセス

本報告では、2つの科学技術イノベーション政策に関する市民参加型ワークショップを調査対象とする。ひとつは、個別具体的な科学技術イノベーション政策の立案以前に実施された、政策立案過程に位置付けられるパブリック・コメントに照準したものである。もうひとつは、科学技術イノベーション政策全体の長期的方針を策定するような、上記と同様に政策立案過程に位置付けられるものである (加納 2013)²⁾。それぞれのワークショップの概要については表1にまとめた。

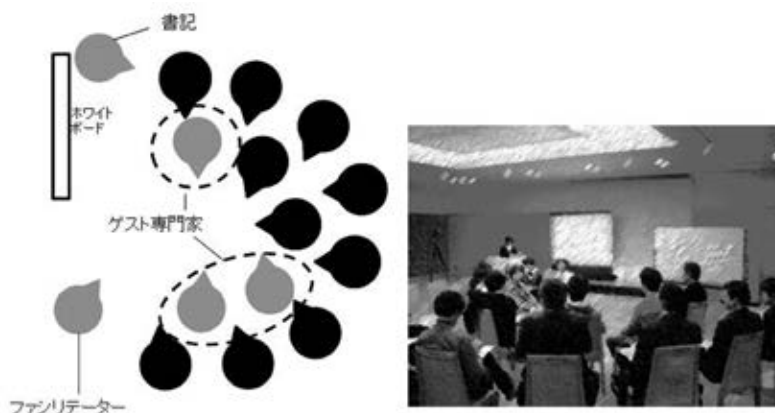


図1 宇宙パブコメワークショップの会場内配置

「Noti's 討論会 ～宇宙基本計画案についてどう思う?～」(以下宇宙パブコメワークショップ) は、宇宙に関する様々なイベントや勉強会を実施している学生団体Noti'sとPESTIの共催である。宇宙パブコメワークショップの実施の流れは以下のとおりである。まず、ゲストである宇宙システム工学の専門家による「宇宙基本計画(案)」の概説が行われた。それを踏まえて、議論の口火として、もう一方のゲストである宇宙物理学の専門家と、科学コミュニケーションの専門家2名が「宇宙基本計画(案)」に対する私見を述べた。その後は、自由討論形式で、参加者全員で「宇宙基本計画(案)」に対する疑問点や意見について議論した。そこで出た意見内容をまとめて主催者側でパブリック・コメントとして投稿した(当日の会場配置については図1参照)。

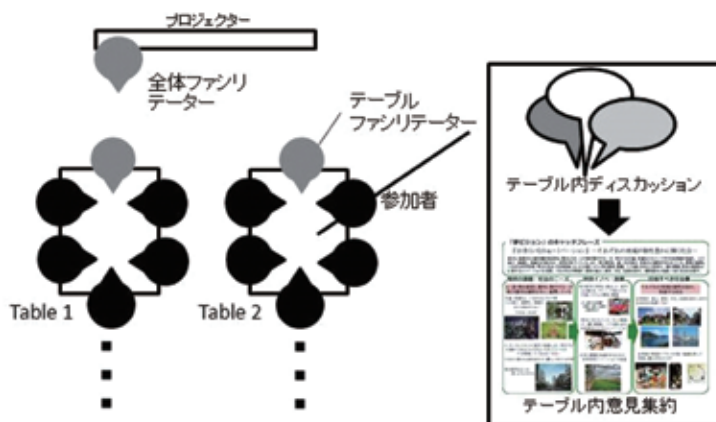


図2 「知ろう・語ろう・届けよう 科学技術イノベーション政策」第2回「語ろう」の会場内配置

後者は、政府の科学技術イノベーション総合戦略を踏まえ、2020年東京オリンピック・パラリンピックを通過点とした2030年の日本の未来を描くというワークショップ(以下夢ビジョンワークショップ)である。主催はPESTIで、「PESTIワークショップシリーズ 知ろう・語ろう・届けよう 科学技術イノベーション政策」と題され、3回1セットで実施された。それぞれ「知ろう」「語ろう」「届けよう」と副題が付され、それに伴ったワークショップが設計された。「知ろう」の回では、「科学技

術イノベーション総合戦略」³⁾についての知識を深めることが目的とされた。続く「語ろう」の回では、参加者が思い描く2030年の日本像について語り合い、多様な意見を出すことが目的とされた。そして最終回の「届けよう」では、「語ろう」の回で出た様々な意見に基づいて、意見をまとめ、政策立案者に届けることが企図された。本報告では、「多様な意見を出すこと」が目的とされた、第2回「語ろう」の回を取り上げる。

当日の流れは、全体司会者より全体の進行についてアナウンスがあった後、各テーブル内でまず、現行の「科学技術イノベーション戦略」で示されている5つの課題（1. クリーンで経済的なエネルギーシステムの実現、2. 国際社会の先駆けとなる健康長寿社会の実現、3. 世界に先駆けた次世代インフラの整備、4. 地域資源を強みとした地域の再生、5. 東日本大震災からの早期の復興再生）の中での優先度について議論を行った。それを踏まえて、2020年東京オリンピック・パラリンピックを通過点とした2030年の未来像を描く際、その通過点として、2020年に何が達成されているとよいか、ということ、科学技術イノベーション政策とオリンピック・パラリンピックに関連させて議論するということが行われた。最終的に、テーブル毎にテーブルファシリテーターの補助のもと、議論をまとめ、それをワークショップの最後に発表し、全体で共有した（当日の会場配置については図2参照）。

なお、今回この2つのワークショップが分析対象として選定されたのは、どちらも「市民の多様な意見を集約し、特定の宛先に届ける」という共通した目標のもとで設計されたからである。そのもとでは、本報告の課題である「産出された意見と発話者アイデンティティの結びつきの特徴」を「意見の多様性を担保した集約実践に関わる課題」と関連させて考えることができるため、ワークショップ設計に資する知見が出せると思われた。もっとも、同種のワークショップ事例をもっと多く集め、比較検討することによって、より詳細な分析と一般的知見が提供可能だと思われるが、今回は速報性を重視したため、2例を中心に据えたものとなる。

2.3 調査の流れ

それぞれのワークショップで参与観察記録と、ワークショップの主催者（筆者ら含む）によるリフレクション記録を検討対象とする。宇宙パブコメワークショップでは、会全体のビデオ撮影を行い、当日のやり取りについてはすべて書き起こしを行った。夢ビジョンワークショップについては、ビデオ撮影はできなかったため、特定のテーブルに焦点をしばって、そこでのやり取りをその場で速記し記録に残すということを行った。

本報告では、これらの音声記録およびフィールドノートを参照し、それぞれのワークショップにおける参加者（ファシリテーター含）が何かの意見を述べる時、どのように、何を述べているかという点について、「彼らが実際にやっていること」からの記述を行う。それにより、「意見を出す」という実践と、「参加者のアイデンティティ」とのかかわりを明らかにする。

3. 意見集約というワーク

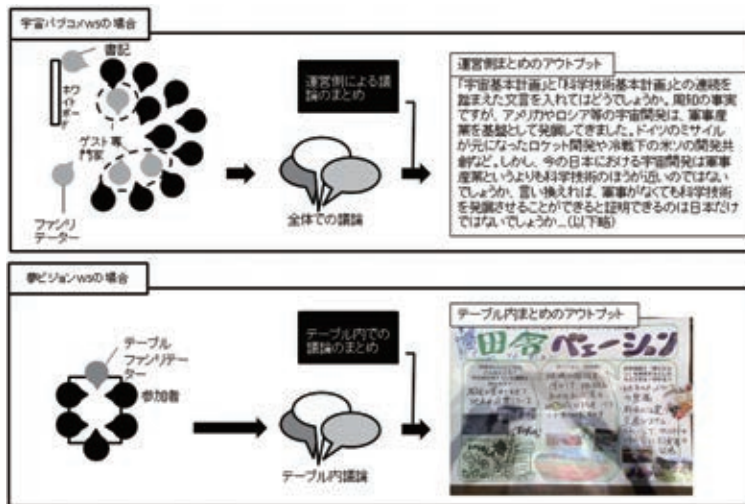


図3 意見集約後のアウトプット事例

前章でまとめたように、本報告で見ていくワークショップは、それぞれ開催趣旨は異なるものの、ワークショップの主題に対する参加者の様々な意見をそのまま政策立案プロセスの過程に送り届けるという立て付けは共通している。宇宙パブリコメワークショップの場合は、主催者側が書記の役割を務め、ワークショップ中に出た様々な意見をメモし、それをパブリック・コメントとして投稿する体裁を整えた。夢ビジョンワークショップは、参加者の人数が多いため、5人から6人をひとつのグループとし、そのなかでワークショップの主題について議論をし、そこで出てきた意見をグループごとにまとめ、それを政策立案者に届けるということが行われた。

それぞれのワークショップは合意形成を目指したものではないが、最終的に参加者から出された意見を「集約する」というワークが入っている。ここで注目したいのは、「集約する」というワークがどのような実践の特徴を持つか、ということである。筆者らがワークショップ終了後のリフレクション実践で気づいたのは、それぞれのワークショップでの「集約物」を見た時、それらがいかなるコンテキストで、そしてどのようなアイデンティティのもとで産出されたのかがわからないようにリデザインされているということだった（図3参照）。そもそも意見を集約するという実践がそのような特徴をもつものなのかもしれない。こうした点がどれほど一般的な見解かは本報告では検討しきれないが、観察された事態は以上のとおりである。

すでに繰り返し述べているように、意見の多様性をどのレベルで担保するか、という問題を考えているとき、意見産出時に発話者によって紐付けられた特定のアイデンティティをどのように扱うか、あるいは集約時にどこまで残すべきか、ということは、ワークショップ側の設計上の熟慮が求められるだろう。ゆえに、(1) ワークショップの参加者が意見を産出するとき、そこではしばしば特定のアイデンティティに紐付いているということと、(2) 合意形成を目指していないのに、意見集約過程においては発話者のアイデンティティがピックアップされない場合があるということについて調査することで、ワークショップの主催側はそのローカルな実践の特徴や構造を理解する必要がある。本報告は実践報告であるため、個々の現象の詳細な分析というよりは、今後個々の現象を精緻に分析する出発点としての、検討すべき内容のピックアップを試みる。その際、今回は(1)に焦点

化する。なぜなら、(2)の分析は(1)の詳細な理解をベースに行われるべきものであり、ゆえにまずは(1)について検討すべき課題の整理を行う必要があるからである。筆者らは、ワークショップ終了後、まず(2)の問題に気づき、それを検討するためには(1)について理解する必要があると思うに至った、という経緯があったため、本報告ではエピソード的に(2)について随所で触れているが、その分析の詳細については、別稿に譲る。

4. 意見と発話者が用いるアイデンティティ

4.1 意見内容を成り立たせる上で表明されるアイデンティティ

夢ビジョンワークショップでは、45名の参加者に1名のテーブルファシリテーターがつき、現行の科学技術イノベーション総合戦略の概要を確認したあとに、各テーブルで「日本でオリンピック・パラリンピックが開催される2020年頃には、どのようなコト／モノが実現されていると嬉しいですか?」という主題のもとでアイデア出しを行った。最終的に、「日本のいいところはどこ? 今日日本が抱えている課題は何だろう?」「夢ビジョン(将来像)」「科学技術で「夢ビジョン」を実現するとしたらどうする?何する?」という項目が書かれたワークシート(図4参照)に各テーブルでアイデアをまとめていくという作業が行われた。

本章は、ひとつのテーブルのやり取りの記録を検討する。記録の対象となったテーブルは、宇宙物理学・科学教育を専門とするテーブルファシリテーター1名の他、4名の一般参加者で構成されていた。今回特に注目したいのは、アイデア出しの場面のやり取りである。そこでは、参加者は様々なアイデンティティを意見提示の際に使い分けていた。このことについて、特定の参加者にフォーカスして検討していく。なお、こちらのワークショップではビデオ撮影ができなかったため、参与観察の記録にもとづいて議論を進める。

図4 ワークシート

エピソード1

ワークショップ冒頭でテーブルファシリテーターは、自身のテーブルに着席している参加者それぞれに自己紹介を促している。参加者の一人であるP1に順番が回ったとき、P1は、「理科の教員をしている」ということのみを述べた。

エピソード2

現行の初等・中等教育において、自然との触れ合いや生活に必要な知識といったことが足りないのではないかという議論が展開しているなか、それまでずっと口を挟まずだまっていたP1が、教員としての経験を語り、「そのようなことはすでにゆとり教育でやっている」と述べる。そして、その経験を踏まえて、「現在の教育でこれまで議論に出たようなトピックを扱うということは難しい」と述べる。

エピソード1は、アイディア出し場面の冒頭場面で、各自がテーブルファシリテーターに促されながら自己紹介を行っているところである。参加者の一人であるP1は、エピソード1にあるように、自己紹介時、自身を「理科の教員」と述べている。こうした自己規定のもとで、例えばエピソード2のように、自身の教員としての経験を基盤とした発言を行う。しかし、P1がワークショップ中、常に「教員として」発言をするかというところではない。例えば、次のエピソードを見てみる。

エピソード3

田舎の交通網について様々な議論を交わしている。そのなかで、JR北海道の赤字経営の事例が出され、それを引き合いに、田舎には電車はいらないのではないかという意見がでる。この場合の取捨選択の軸となっているのは「利益」である。つまり、利益があがっていないということは、地元の人びとに「必要とされていない」というロジックである。このような田舎で、電車の代替として機能するのは自動車やバスであろうという意見が出され、それが充実することがキーではないかという方向にまとまっていく。しばらくこうした議論を傾聴するかたちであったP1がおもむろに、田舎で生活することの不便さとして、これまでの議論で必要だとされたバスの本数もどんどん減らされる傾向にあるということを述べる。

エピソード3では、P1は、「田舎の交通インフラとして電車はいらないのではないか。そのかわり、自動車やバスを拡充すべき」という議論に対して、地方に住んでいる経験に即して（エピソード3のやり取りの以前に、地方に居住していることをP1は語っている）、「実情」を話している。ここのP1は、明らかに「教員として」発言してはいないように見える。この場合は、「教員として」ではなく、「地方生活者として」といった記述の方が適切だろう。このように、ワークショップの参加者が発言時に帯びるアイデンティティは個々の話題や発言ごとに可変的であり、コンテキスト依存的なものである。ただし、いついかなる発言においても、特定の集合的アイデンティティと結びついてそれを理解できるかというところではないという点に注意が必要である⁶⁾。以上のように、やり取りのコンテキストに依存したかたちで、参加者は自身の発言を様々なアイデンティティと結びつけることをやっている。

さらに、そうしたことはファシリテーターによる場の調整・管理においても見られる。本報告では紙幅の関係上詳述しないが、参加者に発言を促す際、様々な属性（IT企業のエンジニア、男性、女性…等）を指示し、そのもとで発言するように言うことが度々見られた（ex.「女性としてどう思いますか？」）。

ここまでで見られたことは、まずシンプルなこととして、(1-1-1)意見には、特定のアイデンティティと紐づくものとして産出されるものがあるということと、(1-1-2)同一参加者でも、意見産出時のコンテキストによって、様々なアイデンティティを使い分けしているということである。しかし、様々なアイデンティティの使い分けは、意見の内容自体を成り立たせるためだけに用いられているわけではない。ある特定のアイデンティティが用いられることにより、その場のやり取りのコンテキストが一定の向きに方向付けられるという場合もある。この点について、次節で見ていく。

4.2 場の支配的アイデンティティ

筆者らが当初関心を持ったのは、前節までに述べた内容の議論であるが、意見産出時のアイデンティティの用い方に焦点化して、今回分析対象としたワークショップを分析していったとき、上述以外のアイデンティティの提示実践も見出された。意見それ自体の理解可能性を探索する際、意見産出時のアイデンティティの取り扱いには様々な用い方があるのを把握しておくことは重要と思われるので、下記にまとめておく。

4.2.1 「専門家」と「素人」

他者とのやり取りの際には、その都度の発言がいかなるアイデンティティに結びつくものとして聞かれうるかという問題が伴う。もちろんそれは、単なる聞き手側の問題に収まらない。今何者として話すかということ、その発言がどのように聞かれうるかということと表裏の関係にある。それはたとえば、教員として、女性として、そして市民として…といったように、発言が産出されたコンテキストや自己提示の仕方によって可変的な特徴を持つ (Antaki and Widdicombe 1998)⁴⁾。

こうした視点でワークショップ中の人びとのやり取りを見たとき、参加者は、しばしば誰にも問われていないのに、自身が何者かを話すことがあることに気づく。では、こうしたことがその場のやり取りにどのように関わっているのだろうか。

以下のやり取りの断片1と2は、宇宙バブコメワークショップで、主催者による進行の説明と、ゲストとして呼ばれた専門家による宇宙基本計画(案)の解説がなされた後のフリーディスカッションからの抜粋である。フリーディスカッションでは、参加者個々の自己紹介の時間は設けられていなかった。宇宙基本計画(案)に対して、何か付記・修正・疑問があれば、全員に向けて個々が発言することができるということと、そこからパブリック・コメントとして出せそうな意見があれば、それを主催者側がその都度まとめ、最終的にパブリック・コメントとして投稿するということが、ワークショップの開催にあたって周知されていた。

まず、断片1を見てみよう。断片1は、宇宙基本計画(案)についての説明及びそれに対する簡単な所見が、後のディスカッションの呼び水として、ゲストとして呼ばれた専門家(科学コミュニケーションが専門。宇宙基本計画に関しては専門外。下記トランスクリプト中のE1)から述べられた直後の場面である。「発言していいですか」という発話が見えるように、どのタイミングで専門家以外の参加者が発言できるようになるのかということがアナウンスされていない場面である。つまり、ファシリテーター以外の一般参加者による最初の発言である。

断片1 (P2 = 参加者その1, E1 = ゲスト専門家その1)

P2: 発言していいですか。

E1: どうぞ、手も挙げなくて発言していただいたら。

P2: まず私の背景を言ったほうがいいと思いますが、私自身はA大学のB研究センターの教授ですけども((自分自身の研究の専門分野について紹介))皆さんの話はですね、宇宙開発に対する、さっ

きも楽天的な話ばかりしている。素晴らしいことばかり。実際の宇宙開発の歴史を見てごらん下さい、何が始まっているかと。(中略)私は、C研究所という核兵器の研究所、所員5千人、年間予算1千億円の研究所の基礎科学の審査員をやっていますが、彼らは核兵器の研究者なんですよ、彼らに平和目的に限ると言ったら、彼らは、われわれは平和のために核兵器を研究していると言うわけです。だから平和という概念も国によって違うということを皆さんも分かったうえで議論しなければいけない。そういう非常に微妙な中での日本の宇宙開発というものは、どうあるべきかと。まさに、その真価が「宇宙基本法」をどう解釈するかということで問われると思います。

E1: そう考えた場合に、先生が考えられる宇宙開発の価値というのは、やることで言うと、どういう可能性が。

ここでのP2の発言で興味深いのは以下の2点である。まず、「私自身はA大学のB研究センターの教授ですけども」と冒頭で言うことで、これからの発言を他ならぬ「A大学のB研究センターの教授」によるものとして他の参加者は聞くことが可能である。そして、その直後に「皆さんの話はですね、宇宙開発に対する、さっきも楽天的な話ばかりしている」と述べることで、これから話すことが少なくとも自身よりも前に話していた専門家らとは違うシリアスなことを述べるということをアナウンスしている。

これらのP2の発言の特徴は、以下2点に見いだせる。すなわち、フリーディスカッションの冒頭で、(1)「Bという研究を専門にしている大学の教授」というかたちで自身のアイデンティティを示したこと、(2) 自分以外の参加者を「楽天的な話ばかりしているみなさん」として自身との対照化をしたことである。男性としてでもなく、家庭における父としてでもない。帯びうる様々なアイデンティティのなかでも、彼は「Bという研究を専門にしている大学の教授」をそこでは選択することによって、識者(または専門家)として振る舞うことを可能にしている。

このように、自他のアイデンティティはやり取りのなかで提示される。ここで重要なのは、こうしたアイデンティティは特定の集団に属していることを示す場合があるということである。この点について、断片2を見てみよう。

断片2 (C1 = 書記、P2 = 参加者その1)

C1: でもまあ、多少つながるかもしれないですけど、要は、技術を持っている人がいるのに知られていないから、つながらないっていうこともあるかもしれないんじゃないかと、そういうこともあるかもしれないと、もし、強力に無理やりつなげるならば。

P2: ちょっとひとつ。あのね、やっぱり必要は発明の母と言うでしょう。われわれの業界では、そうじゃなくて、発明は必要の母です。だから、発明があつて、じゃあ、どう使おう、これ、どう使おうって必要性をいろいろと探していく。それがわれわれの世界の常識から言えることで、私は、だから、いつも見つけるわけ。レーザーをどう使おうと思って。

P2は、自身の発言とそこで示される自身の行動指針(「私は、だから、いつも見つけるわけ。レーザーをどう使おうと思って」)を、自分自身に帰責させるのではなく、あくまでも「われわれの業界」のものとして語る。こうしたことができるのは、断片1で示されたように、自分自身のアイデンティティを職業的カテゴリーのもとで語ったということがあつてのことである。

職業的カテゴリーに自身の発話の理解可能性を位置づけるということは、初めて顔を合わす人びとのなかで、自身の発話をどのように理解すべきか、ということを示すひとつの重要な指し手である。こうしたことをすることによって、当該話者が有する知識や、それに基づく振る舞いへの

期待が参加者間で共有される。それにより、それぞれの場の参加の仕方が調整されていく（秋谷他 2013）。

さて、問題は、このように一人の参加者が自身のアイデンティティを示すことが、場にどのように関わっていくのかということだ。このような振る舞いは、ただ単に自身の発話をいかなるアイデンティティのもとで理解すべきか、ということのみに収斂されるものではなく、他の参加者の参加の仕方にも関係することのようになる。その点について、次節にて検討する。

4.2.2 他の参加者はどう振る舞うか

発話のデザインは、誰かに宛てられているという点において、聞き手（実空間に共在しているかどうかは別として）の存在と不可分である（Sidnell and Stivers 2012）。断片1で見たように、特定の属性を名乗りのなかで示すことは、ただ単に自身が何者かを提示しているだけではなく、これからの発話内容をいかなる立場によるものとして聞くべきか、ということと、その発話を聞く人びとや、これまでのやり取りのコンテキスト上で当該発話が産出される前の発話の位置付けを示す（[楽観的] ↔ [シリアス]）ものであった。本節で検討したいのは、こうしたデザインで発話がなされることによる当該場面への影響である。この点について、ひとつの例として、断片3を見ていく。

断片3（P3 = 参加者その2、P2 = 参加者その1）

P3: 私は実際に衛星をつくっている側の人間なんですけれども、（中略）これまでの歴史の話だったんですけど、これは宇宙に限らない、何でもそうだと思うんです。ただ宇宙が、冷戦をもとにした国威発揚うんぬんから始まったのは間違いのない事実だと思いますけれども、（中略）いま原子力発電所がいろんなところで止まっていますけど、たぶん、これがないと日本の経済は回らなくて、動かしてほしいと個人的には思っているんですけども。例えば宇宙も、いまもう宇宙開発というのを止めると世の中回らなくなってしまうぐらい、宇宙に、実は依存しているので、じゃあ、そこで何ができるのか。

P2: いまおっしゃったことは、歴史的事実のなかで、よく防衛上（聞き取れず）と言うんですね。永世中立国を誓ったスイスは、中立になってから400年、スイスが発明したものは何か、はと時計だけだと。

断片3は、断片1のやり取りを発端にP2がしばらく話し、そこで提示されたトピックについて主にゲストとして呼ばれた専門家らが発言したあとのやり取りである。

ここはP3が初めて口を開いた場面である。断片1と同じフォーマット「私は〇〇（アイデンティティ）ですけれども」でP3は口火を切っている。すなわち、発話冒頭でのアイデンティティの提示をしてから、これまでのやり取りにおける新しい切り口を示すということである。このとき、P3は自身のアイデンティティを「衛星をつくっている側の人間」と述べる。断片1と同様に、特定の職業的カテゴリーのもとで自身の発話を理解できるようにしているわけだが、ここでP3は、同一発話内で「個人的には」ということばも用いている。これは、先に「衛星をつくっている側の人間」と述べていたことにより、ある種の価値観を表明することで、その職業的カテゴリーにおいては一般的な見解であるとは聞こえないように発話をデザインしているということになる。このように、意見を「何者として」聞くべきか、という点については、参加者自身がセンシティブであることが見て取れる。

紙幅の関係上、少数の事例を紹介しているが、断片1や3のように、特定の集合的カテゴリーを自身の帰属先として提示したうえで発言するということは、複数回のワークショップを運営してい

くなかでしばしば見られたことである。さて、本報告ではここまでに、ディスカッションのトピックに関連する個々の職業的カテゴリー、すなわち、より包括的な言葉で言えば、「専門家」として自身を位置づける実践を見てきた。しかし、参加者の誰もがそのようなカテゴリーに自身の発言内容を接続できるわけではない。この点について、断片4を見てみよう。

断片4 (P4 = 参加者その3)

(P2とP3は断片3のやり取りを発端に、しばらくの間2人だけで、それぞれの専門知識に即した知識を示し合うということを行った。ひとしきりその示し合いが終わったあと、若干の沈黙を挟んでP4が口を開く)

P4: 国として宇宙開発をしてきて持っている、いままでのノウハウとか、いろんなことを、むしろ隠すことがないぐらいに、もっと、なって。それが僕、一般ですけど、そういうのは全然こう、宇宙開発を、なんかJAXAがやっているなぐらいの感じで、実際、何をやっているのか全然見えてこないという部分を見ると、もっと一般の人にも知ってもらう部分というのは必要なのかなと。

断片4は、断片1と3で出てきたP2とP3が自身らの専門性に照らした知識を開陳した直後に生じた若干の沈黙を挟んで、別の参加者が話し始めた場面である。ここで話し始めたP4は、自身のことを「僕、一般ですけど」と述べている。「宇宙開発」というトピックに対しては素人であると述べるにより、JAXAの内部がまったく伺えないという発言内容がそのもとで理解できるようになる。この発言が出てくることにより、参加者間で「専門家－素人」というカテゴリーペアがその場に適切に関連した参加役割になる。

以上のような参与観察の結果を踏まえると、以下の問題が指摘できる。すなわち、参加者のなかで偶然に「専門家」が発見されたとき、その場に適切に関連した参加アイデンティティは、しばしば「専門家－素人」を中心としたものとなる。それにより、議論の多くが、各「専門家」にしか知り得ないことの披露と、それに基づいた意見表明で占められることになる。他方、「素人」はその聞き役にまわり、知識受領に指向した、受動的な参加形態となる。あるいは、断片4のように、「専門家」に宛てた情報公開の要求といった内容の意見表明に留まることになる。

こうした参加アイデンティティの表明とそれに伴う参加の仕方の調整は、従来「特定の参加者が話す時間が長くなることによる場の占有」の問題として、ワークショップの実践家には経験されてきた問題のひとつの要因として位置づけることも可能だろう。実際のところ、宇宙パブコメワークショップでは、P2とP3及びゲスト専門家のやり取りにほぼ終始し、さらに、宇宙基本計画案に対する意見というよりは、それぞれの専門家の知識提供が多くの時間を占めていた。その結果、意見出しの時間がほとんど取れなかったということと、「専門家」に対置した参加アイデンティティを付与された参加者の発言がかなり少ないという結果となった。このことは、ワークショップ開催後、主催者側からも反省点として挙がっていた。

4.3 意見集約後も残るアイデンティティ

さて、ここまでは、対話過程のアイデンティティの取り扱いについて見てきた。本節では、そこでの対話内容が集約された後のことについてひとつの問題を提起する。先に述べたように、本報告の対象となったワークショップでは、「意見の集約」という実践が行われたとき、結果として、もともとは意見個々に紐付くものとして、意見産出と同時に提示される特定のアイデンティティが省略される傾向にあったということだった。

たしかに集約物はそのような形式を(主催者側が意図したことではなかったが)とった。このとき、

筆者らを含むワークショップの主催側は、そうした集約物に対して、「市民の多様な意見」「市民のみなさんの意見」といった呼び方をしていた。これはすなわち、ワークショップの参加者全体を総称するのに適当と思われた最大公約数的なアイデンティティが、ワークショップ主催側によって残され／付されて、「集約された意見」の主体として用いられたと言えるだろう。この点も振り返ってみれば、特異な実践であったように思われた。これが間違いに見えないのは、意見を出した総体はたしかに「市民」であり、その点においては正しいからであるが、意見のひとつひとつは「市民として」出されたものではない、ということは、ここまでいくつかの事例を通して検討したとおりである。この点についても、今後、詳細な分析と、それに基づいたワークショップ設計の検討が必要である。

5. まとめ

本報告は、筆者らによる「市民の多様な意見の抽出」を目的としたワークショップ実践において見出された「意見と発話者アイデンティティの関係」を、今後の課題点としてトピック化するものであった。本報告で提示したいいくつかの課題については、今後、よりしっかりとデータ取得とそれを前提とした詳細な分析がなされることによる、現象の解明とそれに基づいたワークショップ設計へのフィードバックが必要となるだろう。

「意見と発話者アイデンティティの関係」について、多様な意見の抽出と集約を目的としたワークショップの設計側が配慮するということは、すなわち、当該ワークショップにおいて、意見の多様性をどのレベルで担保するのか、という問いに取り組むこととパラフレズできる。こうしたことが課題となるのは、本報告の対象となったワークショップに限定されるものかもしれない。合意形成を目指すものや、熟議することそれ自体に価値を置くものに対しては、必ずしもクリティカルなものにはならないと思われる。しかし、科学技術と市民の関係を結び結ぶ媒介者としての役割が科学技術コミュニケーションの実践者を標榜する者にあるとするならば、今後考える価値がある課題のひとつであろう。

謝辞

本研究は、独立行政法人 科学技術振興機構 (JST) 社会技術研究開発センター (RISTEX) 戦略的創造研究推進事業 (社会技術研究開発) 平成24年度採択課題「STIに向けた政策プロセスへの関心層別関与フレーム設計 (PESTI=ペスティ) (代表者：加納圭)」の支援によって行われた。

注

- 1) 本報告の視点の、科学コミュニケーションにおける「新しさ」は、たとえば「平成24年度電源立地推進調整等事業 (革新的エネルギー・環境戦略の策定に向けた国民的議論の推進事業 (討論会事業に係るもの))」によって実施された「エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査」の検証委員会による報告書の以下の記述等から確認できる。「…ただ、グループによっては、活発に発言を繰り返す人が約15名のうち数名に偏り、他の人たちは、グループ討論の終盤になってモデレーターに促されて初めて発言する場面も見られた。今回の討論フォーラムでは参加予定者の男女比が2対1と、構成に明らかな偏りがあった。小グループ討論の内容の詳細な分析は、本報告書の対象外であるが、参加者構成のこうした偏りが、属性別の発言者の偏りなどにつながっていないかなどを、今後、議事録等の記録に基づいて精査する必要がある。」(エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査第三者検証委員会 2012. 20)
- 2) 2つのワークショップにおいて、本報告の著者は以下のような立場で参画した。まず、水町、工藤と加納はワークショップの企画・運営を行った。そして、秋谷と高梨はそうして作られた場において調査を実施した。両者の役割は完全に分かれており、たとえば後者が前者のワークに参加するということはなく、

純粹に「調査者」として当該場面に参与した。

- 3) 「科学技術イノベーション総合戦略」とは、内閣府によって、様々な社会的課題の克服に向けた科学技術イノベーションを創出するための政策立案および実施の全体像を描いたものである。
- 4) 成員カテゴリー化装置(Sacks 1972)の議論にあるように、アイデンティティは、[夫婦][父と子]のように、[家族]という集合のもとで関係対をなし、それが適用された任意の2人の行為の理解を方向づけるものとして用いられることがある。もうひとつは、[家族]のような集合的なカテゴリーのもとで構成されるものではないが、本報告でも検討した[専門家-素人]のように、そこに何らかの規範的な結びつきが期待されるような、標準化された関係対をなすものもある。いずれにせよ、やり取りのなかで自他がいかなる社会関係を取り結ぶかということは、その場に参加している人びとの実践上の問いである。本報告では人称を用いた意見提示と合意形成の関係を中心的に見ていくため、この観点からの詳細な分析は行わないが、「市民参加を標榜した取り組みにおいて、その場でなされていること」を明らかにしていくためには、今後この観点からの分析も進めていく必要がある。この点については次稿の課題としたい。

●文献：

- 秋谷直矩・水町衣里・高梨克也・加納圭 2013:「知識の状態を提示すること: 再生医療にかんするグループインタビューにおける参与構造の分析」『科学技術コミュニケーション』13, 17-30.
- Antaki, C and Widdicombe, S. 1998: *Identities in Talk*, Sage.
- Drew, P and Heritage, J. (eds.) 1992: *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings*, Cambridge University Press.
- エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査第三者検証委員会 2012: 『「エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査」検証報告書』
<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/npu/kokumingiron/dp/index.html> (2014年2月28日閲覧)
- Fishkin, J. 2009: *When the People Speak: Deliberative Democracy and Public Consultation*, Oxford University Press; 曾根泰教監訳『人々の声が響き合うとき: 熟議空間と民主主義』早川書房, 2011.
- 船橋晴俊・壽福眞美編 2013: 『公共圏と熟議民主主義: 現代社会の問題解決』法政大学出版局.
- Garfinkel, H and Sacks, H. 1970: "On Formal Structure of Practical Action," J. C. Mckinney and E. A. Tiryakian (eds.) *Theoretical Sociology*, Appleton-Century-Grofts, 338-366.
- Goffman, E. 1981: *Forms of Talk*, University of Pennsylvania Press.
- Goffman, E. 1963: "Behavior in Public Places: Note on the Social Organization of Gathering." Free Press; 丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房, 1980.
- Heritage, J and Watson, R. 1979: "Formulations as Conversational Objects." Psathas G. (ed.) *Everyday Language*, Irvington Press, 123-162.
- Hester, S and Eglin, P. (eds.) 1996: *Culture in Action: Studies in Membership Categorization Analysis*, University Press of America.
- 加納圭 2013: 『戦略的創造研究推進事業 (社会技術研究開発) 平成24年度研究開発実施報告書: STIに向けた政策プロセスへの関心層別フレーム設計 (PESTI=ベスティ)』
<http://www.ristex.jp/examin/stipolicy/index.html> (2014年2月28日閲覧)
- 小林傳司 2007: 『トランス・サイエンスの時代: 科学・技術と社会をつなぐ』NTT出版.
- Sacks, H. 1972: "On the Analyzability of Stories by Children," Gumperz, J and Hymes, D. (eds.) *Directions in Sociolinguistics*, Rinehart and Winston, 325-345.
- Sidnell, J and Stivers, T. (eds.) 2012: *The Handbook of Conversation analysis*, Willey-Blackwell.
- 曾根泰教・柳瀬昇・上木原弘修・島田圭介 2013: 『「学ぶ, 考える, 話しあう」討論型世論調査: 議論の新しい取り組み』木楽舎.
- Veen, M., Molder, H., Gremmen, B and Woerkum, C. 2012: "Competing agendas in upstream engagement meetings between celiac disease experts and patients," *Journal of Science Communication*, 34, 460-486.
- 若松征男 2010: 『科学技術政策に市民の声をどう届けるか』東京電機大学出版局.

八木絵香 2010: 「グローバルな市民参加型テクノロジーアセスメントの可能性: 地球温暖化に関する世界市民会議 (World Wide Views) を事例として」『科学技術コミュニケーション』7, 3-17.